

みほとけにいだかれて

■ 楽曲データ

歌詞：日曜学校同人 作詞

楽曲：野村成仁 作曲（藤井清水 編曲）

発表：－

初演：－

初出：『サンブツ歌』 興教書院 1915年9月（歌詞）

『サンブツ歌 略譜入』 興教書院 1915年10月（楽譜）

管理番号：M1882

■ 創作の経緯

日曜学校運動において創作され、用いられた「讃仏歌」のなかの1曲。歌詞初出資料での題名は《葬式の歌》。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第3巻収録

底資料：『和英標準佛教讃歌勤式集』 本派本願寺内翻譯課 1939年

比較資料：－

校訂の詳細：特記事項なし

■ 解説

お釈迦さまが四苦八苦のなかに「愛別離苦」を説かれていますように、愛する人と別離しなければならない苦悩は、大変深いものがあります。ことに、子どもに先立たれたときの悲しみは、なお一層深いものでしょう。また、家族にとどまらず、これまで共にお寺に参り、み教えを聞き、語り、ひとつ心に結びあった同信の同朋を失ったときの悲しみも、言葉では言い尽くせないことでしょう。

この歌は、今は亡き故人を偲ぶ追悼の歌です。歌詞は4番まであり、それぞれの最終行が「悲しきよ」「かしこきよ」「うれしきよ」「とうときよ」と変化していきます。ここから読み取れるように、「亡き方を偲び悲しみにのみ落ち込むのではなく、今はお浄土から私たちを呼び覚ましてくださるみ仏となられたことの尊さ」をしみじみと歌いかけています。その意味では、少し長くなったとしても、4番まで歌い通すほうがよいでしょう。追悼会などで歌っていただくとうれしいと思います。

作曲の野村成仁は、1874（明治7）年生まれで、東京音楽学校（現・東京芸

術大学音楽学部)卒業後、千葉県師範学校教諭を経て、平安中学(現・平安高校)に勤務しました。《宗祖降誕会》《報恩講の歌》《追悼の歌》など、多くの仏教讃歌を作曲し、全国の教区を回ってその普及に努めました。1947(昭和22)年5月16日、73歳で亡くなりました。

◆歌い方の注意

この曲は短調ですが、テーマを同じくする《追悼の歌》は長調ですから、場面によって選択することもできます。

- ①文語調の歌詞ですから、歌う前に声に出して読み、語感(言葉の意味と響き)をはっきりつかみ、慣れておくことが大切です。
- ②8分の6拍子ですが、8分音符3つを1拍とし、1小節を大きな2拍子と感じて歌えるように練習しましょう。振り子がゆっくり動く感じ、あるいはブランコがゆっくり揺れている感じをつかむと、全体がレガートに(なめらかに)歌えます。
- ③2・4小節目のように、偶数小節の長い音は十分に延ばし、短くならないように注意しましょう。
- ④付点4分音符=44とゆっくりした曲ですが、あまりだらだらとならないように。
- ⑤4小節をノンブレス(息継ぎをしない)で歌うのが望ましいでしょう。2小節で息継ぎをする場合は、すばやくしましょう。
- ⑥1小節目の音程ははっきりととり、出だしの「み」を押え込まないように歌いましょう。
- ⑦7小節目の下降音型は、音が下がりやすいので緊張感を保って歌いましょう。
- ⑧9～12小節目はいちばん音量が必要な部分ですが、力まず、声を頭のとっぺんに抜けさせるようなつもりで響かせます。12小節目は、最後までディミヌエンド(だんだん弱く)しないように。
- ⑨13小節目の出だしの言葉は、はっきりと発音しましょう。
- ⑩最後の2小節に、大事な言葉が出てきます。音量はピアノ(弱く)ですが、子音をはっきりと発音し、語感を深く味わって歌いましょう。
- ⑫各節2行目の「西の岸」「慈悲の国」「花の里」「宝楼閣」、これらはすべて阿弥陀さまのお浄土を意味する言葉です。大切に歌いましょう。

解説執筆：大分哲照(御堂演奏会指揮者 福岡教区西嘉穂組明圓寺住職)

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 8(仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第133号収録)を加筆・修正のうえ、転載。